



Alacrity 通信

Alacrity 通信 第3号 2022.10.28 発行

編集 Alacrity Inc.

<https://alacrity.jp>

東京都大田区西蒲田 8-24-1 TEL 03-5408-9755

このたびは Alacrity 通信 第3号を発行いたしましたのでご案内いたします。本コンサートへご来場いただいたお客さま限定で、この物語の主人公ミハイルと綾、演奏された作品と作曲家について、そして編集部コラムでは大正から昭和初期までの日本に西洋文化が取り入れられてきた歴史について6回にわたりご紹介いたします。

Original Concert シリーズ

クラシック音楽と日本の歴史

Vol. 1 - The Russians

Violin & Piano Duo ~ 歴史 "Story"

「ミハイル・グリゴリエフの物語」

ミハイル・グリゴリエフ

Mikhail Petrovich Grigoriev

History

“充実した人生”の定義を変えたりディアとの出会い

日本文学研究者・翻訳家としてのミハイル・グリゴリエフの東京生活は充実していました。裕福な日本人妻綾の家族と共にあり、口を糊するためだけにあくせく働く必要はなかったものの、生来勤勉で、内戦下のロシアで家族を必死に支えてきた彼は、そうした恵まれた環境に決して甘んじることはありませんでした。義兄川路柳虹を通じて広がった文化人との交流をきっかけに、日本文学の研究・翻訳に没頭したり、音楽活動を行ったり、心から愛してやまなかった学術と芸術に関わる仕事を続けられたことは、異国の地であって故郷を恋い慕い続けたグリゴリエフにとって大きな救いだったに違いありません。

しかしながら、のちに移り住むこととなった、満州におけるハルビン生まれのロシア人詩人リディア・ハインドロワとの出会いは、グリゴリエフにとって、そのような“充実した人生”の定義を大きく変えてしまうほど大きいものでした。

2人の出会いは1939年。南満州鉄道（満鉄）職員としてハルビンに移住していたグリゴリエフが、リディアの住む大連に移る直前のことでした。夢にまで見た故郷ロシアを体現する街ハルビンで、東京時代と変わらず（あるいはそれ以上に）、生き生きと文芸活動にいそんでいたグリゴリエフは、新聞記者として勤める傍ら詩人としての活動も行っていたリディアの、その卓越した作品に強く惹かれていました。同年、家族に先立って大連入りを果たしていた彼は、早速憧れの詩人との面会を果たすこととなります。日本占領下の大連は、さまざまな国の文化が入り混じったコスモポリタンな街でしたが、中でもロシア文化関連のイベントは数多く催されており、その中心であったロシアン・



Courtesy of Paul Gregory

クラブが彼らの待ち合わせ場所になりました。文学談義への期待を膨らませながらリディアの到着を待っていたグリゴリエフ。そんな彼の心を射抜いたのは、車から降り立った彼女の「コーカサス的な」美貌でした。

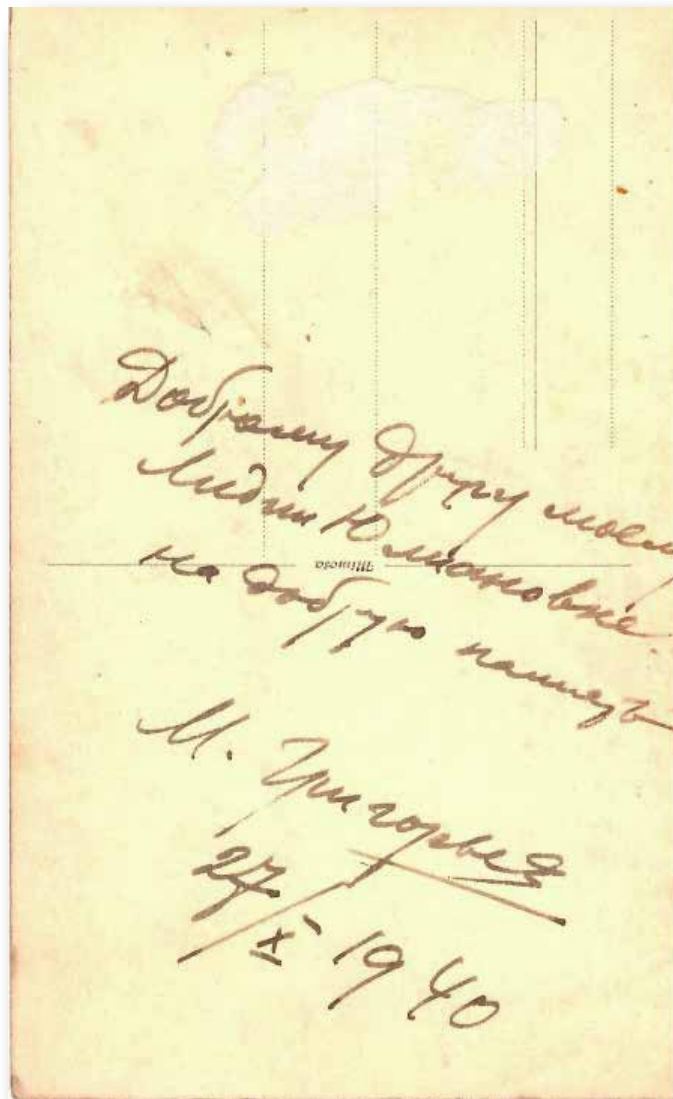
あてやかな外見に反して、リディアはつつましかで家庭的な気質を持ち、同じく新聞記者であった夫と2歳になる娘との3人暮らしに満足している様子でした。自分と同じような詩への情熱はなくとも謙虚で誠実な夫と可愛らしい娘との静かな日常においては、冒険やロマンスなど微塵も求めてはいなかったのです。そんなリディアに対するグリゴリエフの第一印象は、「遠慮がちで聡明、珍しいくらいにきちんとしている。この難しいご時世にあってはとても稀で、一緒に働く楽しそうな人」というものでした。ロシアン・クラブ

での、当たり障りのない話題から始まった 2 人の会話は驚くほど弾みました。芸術的嗜好、哲学、詩への情熱、そしてロシアへの強烈な思慕。あらゆることに共感し合える相手にめぐり合ってしまったグリゴリエフとリディアが、危険を知りつつも急接近してしまうのにそれほど時間はかかりませんでした。

2 人の関係は、結局、大連のロシア人コミュニティでは公然の秘密となりました。お互いを求めつつも、家族への強い愛情も捨て切れなかった 2 人は、やがて皮肉にも正反対の道を選ぶこととなります。目に入れても痛くないほど愛した 2 人の娘たちと、異国の地で自分たち家族に安定を与えてくれた妻をどうしても捨てられなかったグリゴリエフ。それに対して、リディアはグリゴリエフとの不倫関係を夫に告白、ついに離婚に至るのです。ロシア正教のしきたりにより娘の親権も失ったリディアは、その後追い打ちをかけられるように、思想的に危険であるという理由から突然新聞記者の職を失い、結果、上海へ移ることになってしまったのでした。

離れ離れになったのちも、やがて結ばれる将来を夢見て情熱的な手紙を交わし合っていた 2 人でしたが、リディアが大連を去ってしまったからのグリゴリエフの憔悴ぶりは、周囲の目にも明らかでした。もはや隠すすべのなくなってしまった彼は、妻の綾にリディアとの関係を告白しましたが、言い争いの末に離婚に合意したリディアの夫とは異なり、綾は別れることに決して同意しませんでした。次第に、リディアはグリゴリエフ自身の煮え切らない態度にいら立ちを募らせ、手紙でも争いが絶えなくなっていました。グリゴリエフが不慮の死を遂げたのはまさにそんな時でした。リディアは、綾の代理人からの手紙によって彼の死を知ることになるのです。

後年、ソビエト連邦の国籍を得たリディアは、グリゴリエフと共に夢に見た“故郷”ロシアの地にたどり着きました。公にグリゴリエフの死を悼むこともできず、ただひたすら彼への届かぬ想いを書きつづったノートは、リディアの死後ようやく娘の手によって出版されました。現在リディアは、ロシア南部の都市クラスノダールの墓地で、前夫アレクセイの隣に眠っています。



「親愛なる、リディアへ」
ミハイル・グリゴリエフより
1940年10月27日

参考文献

澤田和彦「〈ロシアのラフカディオ・ハーン〉—ミハイル・グリゴリエフの生涯と翻訳活動—」(望月恒子他共著『20世紀前半の在外ロシア文化研究』平成25~27年度科学研究費補助金研究成果報告書、2016年)

西川正也「ジャン・コクトーの日本訪問(補)」(『共愛学園前橋国際大学論集』No. 6、2006年3月)

バイオリンとピアノのためのソナタ第1番より1楽章
1st movement from Sonata for Violin and Piano No. 1
in E flat major

1895年にウィーンで作曲されたこの作品は、さわやかなピアノと柔らかい旋律の2つの主題からなるソナタ形式の器楽作品であり、日本人初の本格的なクラシック音楽作品です。

幸田 延

(1870年4月19日～1946年6月14日)

1870年、東京に生まれた日本を代表するバイオリニスト、ピアニストであり作曲家。また、多くの演奏家、声楽家、作曲家を育てた優れた教育者でもあります。妹の幸田幸（安藤幸）もバイオリニストであり教育者。2人は“幸田姉妹”として有名です。



幸田 延 留学当時

西洋音楽の普及に尽力した女性音楽家の類いまれな人生

幕臣・幸田成延と母・猷（ゆう）の長女として生まれた延は、幼い頃に教育熱心な母から長唄と三味線の手ほどきを受けました。1876年、母は音楽家としての才能を見せ始めた延を、お茶の水の東京女子師範学校の附属小学校へ入学させました。そして1881年、延にとって運命の出会いが訪れます。それは、お雇い外国人としてアメリカから来日し、当時唱歌を教えていたメーソンとの出会いでした。彼の目に留まり才能を認められた延は、本郷にある音楽取調掛（のちに東京音楽学校、現在は東京藝大）でピアノの個人指導を受けます。また、この頃からバイオリンも習い始め、やがてメーソンをはじめとする助手たちの手ほどきにより、延はバイオリニストとしての才能を開花させていくのです。

1889年、延は大きなチャンスを手に入れます。日本初の第1回文部省派遣留学生として、アメリカとヨーロッパで西洋音楽を学ぶことを命じられたのです。同年5月、19歳の延は横浜からアメリカのボストンへと出発します。延は留学先のニューイングランド音楽院

でバイオリン専攻として学び、またボストン交響楽団などの演奏を聴き、感銘を受けたのでした。翌年20歳になった延は、さらなる研鑽を積むためオーストリアへ渡ります。ウィーンに到着した延は、ドイツ語の勉強と入学試験の準備を経て、翌年ウィーン楽友協会音楽院への入学を認められます。延は、この時合格した受験生12人の中で唯一の女性でした。

ウィーンではバイオリン専攻としてヨーゼフ・ヘルメスベルガー2世に師事し、また作曲法はロベルト・フックスに師事しました。そして、1895年にフックスの下で作曲した作品が「ヴァイオリン・ソナタ第1番変ホ長調」（未完）でした。この曲は、ウィーン大学在学中に延が初めて習作として作曲した作品です。当時のウィーンでは、ワルツの作曲家として有名なヨハン・シュトラウスやブラームス、バイオリニストであり作曲家のクライスラーなど名だたる音楽家たちが活躍していましたが、彼らは延の作品にも多くの影響を与えたことでしょう。

1895年、延は5年間の留学生生活を終え日本へ帰国。25歳の延は東京音楽学校教授に就任し、のちにピアノ科教授にも任命されました。帰国当初、延は精力的に

バイオリンの演奏活動に励み、1897年6月の東京音楽学校楽友会演奏会では、ウィーンで作曲した「ヴァイオリン・ソナタ第1番変ホ長調」(未完)が自身の演奏で初演されました。延が27歳の時でした。

本場ヨーロッパで吸収した延のバイオリン演奏は、日本の西洋音楽界をはじめ人々に多くの影響を与えました。また、延は教育者としても活躍しました。バイオリン、ピアノの他に作曲や声楽も教え、瀧廉太郎や山田耕筰ら多くの弟子を育てています。女性音楽家として初めてアメリカ、ヨーロッパへの留学を経験し東京音楽学校教授に就任した延は、当時、新聞で取り上げられるほど高額な収入を得ていました。まさにキャリアウーマンそのものだったのです。

しかし、帰国後の延には一方で壮絶な人生が待ち受けていました。それは日本の男尊女卑の社会風潮の中における、女性音楽家に対する偏見や差別でした。延は、激しい嫉妬や嫌がらせ、壮絶なバッシングに遭い、1909年、39歳の延はその苦しみから逃れるかのように東京音楽学校へ辞表を提出します。そして、傷ついた心を癒すため日本を出て留学先であったベルリンへと向かうのです。当地でオペラやコンサートを楽しんだり、恩師や友人に会ったりすることで傷ついた心を癒した延は、その後、パリやロンドンへと旅を続けたのち、1910年8月に日本へ帰国。この時、延は40歳でした。

1911年、東京音楽学校に再び辞表を提出して正式に退職。その後、兄の勧めにより紀尾井町3番地に母・猷と共に暮らしました。延はここで教授所「審声会」を開き、人生の後半は教育者として弟子たちを教え育てました。「西洋音楽を日本で普及するためにはまずは家庭の中から」との考えがあった延は、弟子だけではなく素人のお嬢さまへのお稽古を行うようになりました。それまでのキャリアに比べると平凡ではありましたが、こうして延は日本に西洋音楽を普及するための活動に後半生を費やすことになるのです。

時は移り、時代は大正から昭和となって、日本は戦争へと向かっていきます。70代となった延は、空襲が激しくなってから終戦を迎えるまでの間、東京から信州へと疎開して暮らしました。終戦後は、母と暮らした思い出の紀尾井町の家へ戻ります。しかし、晩年の苦勞から延は心臓が弱り病に伏せるようになりました。そして1946年6月14日、延はついに76年の生涯に幕を引きます。

明治から大正期のグローバル文化の押し寄せる波の中で、西洋音楽と出会い、比類なき才能と運のみならず、自身のあくなき努力によって、日本における西洋音楽界の旗頭となり、常にその最先端を走り続けた幸田延は、まさに日本を代表するスーパーウーマンと呼べるでしょう。



幸田 延 晩年

Alacrity 編集部

編集部コラムは次のページへ



編集部

大正モダン

コラム



クロスオーバーする多彩な文化

大正 4 年から昭和にかけて一世を風靡したものの一つ、「セノオ楽譜」。1 曲ずつが 1 つの印刷物になった「ピース物」で、世界の名歌・名曲を集めたその数は千数十点に及びます。西洋の歌曲も含めた独唱歌に加え、帝国劇場や浅草オペラで話題を集めていたオペラやオペレッタ、海外の有名ソリストの来日公演で演奏されたクラシックの名曲など、当時好んで演奏され、聴かれていた作品が選ばれていたようです。曲がイメージしやすいように解説が付いた鑑賞の手引きになっている上に、20 銭から 30 銭という庶民的な値段だったことで、大変売れたのだとか。

注目すべきはその販売方法で、特約店販売と通信販売という 2 種類。楽器店や三越呉服店などの「特約大販売所」に買いに行く、これが 1 つ目の購入方法。ちなみに、三越は当時はまだ三越呉服店という名称でした。「今日は帝劇、明日は三越」という当時の有名なキャッチコピーが象徴するように、中産階級の奥さまや子女たちが集まる文化的な場の代表だったのです。

直接買いに行けない遠隔地の人はどうするのかというと、送料 2 銭で郵送してもらう、これが 2 つ目の購入方法です。今でこそ当たり前前の販売方式ですが、当時としては画期的で、これによって日本全国に「セノウ楽譜」が届けられ、多様な音楽が広まることになったのです。

「セノウ楽譜」が爆発的にヒットした極めつけの仕掛けは、「表紙の絵」。そのデザインを担当した画家の一人が竹久夢二でした。バイオリンやマンドリンをはじめ、家庭に国産の安価な楽器が普及し西洋音楽を身近に感じるようになってきていたことから、楽譜の需要は高まっていました。そこに、大人気の夢二の表紙絵とくれば、それはもう最強のセールスポイント。「刷りが乾かないうちに売れていった」とか。それぞれの曲の内容に合わせてデザインされた絵も題字もとてもモダンで洗練されていて、今見ても驚くほどに新鮮です。

「待〜て〜ど 暮〜らせ〜ど 来ぬ人を〜」と切ない恋心をうたった「宵待ち草」、あまりにも有名ですね。自らの失恋体験を映した夢二の詩に、バイオリン奏者・多忠亮が曲を付けた「セノウ楽譜」が大正 7 年に発表されるとたちまち大ヒットし、後世まで歌い継がれる日本の代表的な抒情歌となりました。詩と美術と音楽というそれぞれ違うジャンルの文化がクロスオーバーしながら当時の人々の生活の中に広く深く浸透して

いったことを物語るひとコマです。

さて、その後、昭和に入ると人々の関心は新しい方向へと移っていきます。ラジオとレコードが普及し、音楽の世界も次のステージへ。流行歌の黄金時代の到来です。



ミネトンカの湖畔 (改訂版)



春の宵

配信期間：URL より各号配信日から 30 日間閲覧可能（非公開）
2021 年 公演ご来場者さま（6～11 月まで / 月 1 回）
2022 年 公演ご来場者さま（8～1 月まで / 月 1 回）

第 4 号のご案内は、11/25～11/28 の配信となります。

【お問合せ先】
お問合わせフォーム：<https://alacrity.jp/contact/>
E-mail: music@alacrity.jp

